

県北地域における養殖業の現状について

【生産】

北茨城市から大子町にかけての県北山間地域には、ヤマメやイワナ・ニジマスによるサケ科魚類の養殖や釣り堀を営む業者が現在32件あります。サケ科魚類の飼育条件として、年間を通じ水温が20度以下の冷たい水であること、消費する酸素量が多いため清水で大量の水が取水出来ることが重要であり、この条件を満たせる地域は必然的に県北山間地域となります。

平成8年度のマス類養殖の年間生産量は94トン、生産額はおおよそ1億円であり、マス類の養殖業は地域地場産業として県北山間地域振興の一躍を担っています。

【営業形態】

業者の営業形態は様々で、「発眼卵や稚魚を成魚まで飼育し、県内や県外へ出荷する養殖業」を始め、「飼育した成魚を釣り堀に用いこれを食させる業種」や「町直営の養殖場を整備し、町特産品とする魚種の生産・開発を行っている施設」、「村の高齢者雇用対策の一環として、河川放流魚の生産に取り組んでいる施設」などがあり、最近では、「広大な池を配置し、ルアーやフライ・フィッシングなど流行の最先端の釣り堀を営む業者」が増加しています。

【魚の特徴】

養殖用の発眼卵や稚魚を生産する種苗生産業者は2件あり、里美支場においてもその一部を担っています。本県で養殖されている魚の特徴として、ヤマメの場合はパーマークがはっきりと現れる系統を選抜育種してきたことから、河川放流用として県外から稚魚や成魚の需要が多くあります。しかし、種苗生産業者が少ないことや、水量の点から生産量が少なく飼育した魚を自家消費する経営体が多いため、放流用として出荷できず需要に対応出来ていない状況にあります。

ニジマスの場合は、単価が安いこともあり、現在本県での種苗生産は行われておらず、また卵や稚魚から行う養殖ではIHN等のウイルス感染による被害のリスクが大きいこともあり、ほとんどの業者が成魚を県外から購入している状況にあります。

【バイテク魚の生産】

里美支場では、バイオテクノロジーを駆使したヤマメ全雌魚やヤマメ全雌三倍体魚などの生産を行っています。ヤマメはオスとメスでは成長差があるため出荷までに選別作業を何度も行う必要がありますが、全雌魚では揃って成長するため、作業の効率化が図れます。それに加え、養殖ヤマメは2年で成熟して死んでしまいますが、全雌三倍体魚は成熟しないことから2年以上の飼育が可能となり、大型のヤマメが生産できます。大型化によりお刺身などの新たな食材としての需要も期待されています。

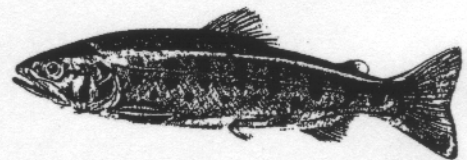
しかし、バイテク魚は河川放流用としては出荷できないことや、全雌三倍体魚の場合大型のヤマメを生産するのに2年以上の飼育期間が必要になることがデメリットとなります。

今年度、里美支場において採卵した魚種別の採卵量を表-1に示しました。バイテク魚をもっと多く利用したいとの業者側の要望はあるのですが、大型ヤマメを飼育するだけの施設規模や水量不足の問題があり、当面養殖可能な適地の選定が課題となっています。

【近年の動向】

景気の低迷や供給量の増加により養殖サケ科魚類でも価格の低迷が続いていますが、一方では、レジャーの多様化が進み、これ等魚種の需要の増大は各種施設の増加により期待されています。現在、自然河川を利用した管理釣り場は1河川のみ行われていますが、このような利用方法も考慮し、自然を生かした総合的開発が望まれます。

近年、流通機能の多様化が進みウイルスや細菌性の魚病による被害が頻繁に発生するようになりました。里美支場では、これらの問題に対処するため、バイテク技術を用いたより良い養殖魚の品質向上やカジカなどの新しい養殖対象魚の導入開発に取り組んでいます。



ヤマメ

表-1 平成10年度の採卵状況

魚種	種類	採卵数(千粒)
ヤマメ	全雌	150
	全雌三倍体	53
	通常	218
ヤマメ 計		421
イワナ 計		404

担当：里美支場 (TEL：0294-82-2448)